

## G. ジンメルの都市論について

居 安 正

本文中の（内）の記号については本文末の「引用文献」をみられたい。

### I. モデルネの現象学的社会学者としての G. ジンメル

ここで考察するのは G. ジンメルの論文「大都市と精神生活」(F) である。この論文は、社会学では周知のシカゴ学派の都市研究の出発点となり、この論文の内容を都市の実証的研究のうえに発展させた L. ワースによれば、これは「社会的な立場からの都市についてのもっとも重要な唯一の論文」(21; 219) と賞賛され、社会学においては今にいたるまで広く都市社会学の古典のひとつとされている。ところがこの論文を含めて、ジンメルの社会的な業績については、歴史学者からは厳しい批判が加えられてきた。たとえば E. トレルチは、ジンメルが「歴史を、空想といういくら自由な遊戯に変えたこと、……これがモデルネのもっとも固有な本質である」(24; 431) と述べ、また歴史学者としての性格を残す M. ウェーバーは「通常、あるいは少なくともきわめてしばしば決定的な点は、専門家が『事実』の問題、経験的な問題を取り扱っているところで、ジンメルは『意味』を、われわれが現象から獲得することのできる（あるいはできると信じる）『意味』を考察しようとする」(26; 161) と書いている。

ところでこの論文を含めてジンメルの業績は、彼の著作集の 1989 年以降の刊行とともにこれらの賞賛と批判をこえて、あるいは賞賛と批判の妥当する点のために、今日では新しい評価をえつつある。そのひとつは彼の現象学的な傾向であり、いまひとつは彼のモデルネの考察である。とはいえ彼は、

現象学の創始者 E. フッサールより 1 年の年長であり、親しい関係にあったとはいえ、特に彼から強い影響をうけたとはいえず、フッサール自身もジンメルが社会学の研究に専念していたころには、社会についてはほとんど論じてはおらず、現在の社会学における現象学は、フッサールの影響をうけた M. シェーラーや A. シュッツに始まり、またモデルネ問題はこれまたごく最近にいたって論じられるようになったものであり、したがってジンメル自身がこれらを意図したものではない。とすればこのことは、ジンメルの研究対象と考察の方法とが、期せずしてモデルネにたいする現象学的な考察となったことを示すといえよう。したがってここでは、以上のようなジンメルの問題とその考察方法、すなわち「空想という自由な遊戯」と「意味の考察」が、なぜこのような評価をもたらしただかを考察する。このことはジンメルへの理解を深めるのみではなく、とくに現代における彼の社会学のもつ意義を、とりわけわが国の社会学にとっての意義を明らかにすることにもなる。

しかしこの考察のためには、一部の人びとには周知のことではあるが、ジンメルの学的生涯の社会的背景と、そこにおける彼の社会理論の展開とを簡単に見ておく必要がある。

## II. ジンメルの生涯と社会的背景

G. ジンメルは 1858 年、プロイセンの首都ベルリンのフリードリッヒ街とライプチヒ街の交わる角に生まれた（1；1-51）。ベルリンの中心からやや離れた土地、大阪の中心を梅田とすれば梅田新道あたり、京都の中心を烏丸四条とすれば烏丸三条あたり、東京の中心を銀座とすれば新宿が渋谷あたりになろうか。76 年から 81 年にかけてベルリン大学において民族心理学と哲学を学んだ。当時学生は各地の大学を遍歴したが、彼は学生時代をつうじてベルリンにとどまった。84 年にベルリン大学の私講師となったが、彼の名声と業績にもかかわらず不遇であり、後に「学会の異邦人」（17；X）と称された。彼がユダヤ人であり、当時ベルリン大学、ひいてはドイツ哲学界に君臨した W. デイルタイとの不和にくわえて、彼の業績が当時はまだ公認

されていない社会学にあったことも、その理由としてあげられる。M. ウェーバーが『職業としての学問』において、大学の教職を希望するものについて、「もしその人がユダヤ人であったならば、われわれはもとより『すべての希望をすてよ』という」(2 ; 20) と述べたのは、ジンメルについての彼の体験にもとづくものであった。1908 年にジンメルのハイデルベルグ大学の正教授就任問題が生じたとき、ジンメルを高く評価するウェーバーは彼の推薦者となったが、これは成功しなかった。この体験が、彼に以上のように語らせたのである。

ジンメルがようやくシュトラスブルク大学に正教授として迎えられたのは 1914 年、彼が 56 歳のときであり、ベルリンを愛した彼も経済的な理由からそれを受けざるを得なかった。シュトラスブルク大学への彼の赴任にさいして、ある新聞は「ジンメルなきベルリン」の題目のもとに大学を批判したという (25 ; 266)。彼の赴任後まもなく第一次世界大戦が勃発し、学生数も減少するなかで彼は 18 年に肝臓癌で死亡した。60 歳であった。

ここで問題とする論文のみでなく、彼の業績全体とも関係するので彼とベルリンとの結びつきを、彼の息子 H. ジンメルの文章でみておこう。

「父はたんにベルリンにおいて成長したのみではなく、そこに——多くの旅行をのぞけば——たえず生活したのみではなく、彼はまた彼の運命がこの都市の運命と強く結ばれていると感じてもあった。彼はたびたび自らそのことをほぼ次のように述べた。『世紀の転換期頃とその後の年月にかけての、ベルリンの大都市からの世界都市への発展は、私自身のもっとも激しくもっとも大きな発展の時期と一致する』。あるいは『おそらく私は他の都市においてもまた価値ある何かをしたであろうが、私がここでこれらの年月になしとげたこの特別な仕事は、疑いもなくベルリンの環境と結びついていた。』」(265)

次にベルリンのこの発展と結びつくドイツの歴史的発展をみておこう。

71 年のドイツ帝国の成立は、第二次産業革命の開始と時期を同じくし、

ドイツはビスマルクの強力な指導のもとに、それまでの後進性のゆえに過去の資本主義的な遺産に妨げられることなく急速に発展することができ、70年代にはフランスを抜き、世紀の交替期にはイギリスにせまった。これにもなって労働者を中心に人口が都市に集中した。これを人口10万以上の都市についてみれば、1850年には僅か5、70年には8を数えるにすぎなかったが、1900年には51となり、そのうち5つは人口50万以上を擁し、これにおうじて「大都市 Grossstadt」という語も出現し、ベルリンの人口はこの間に40万から10倍の400万となり、人口数において世界で第5位となった（7；270、15；103）。F. テンニエスの『ゲマインシャフトとゲセルシャフト』（1889年）（5）もこの激しい社会的変化を論理的に反映したものといえることができる。

ところが後進国ドイツのこの急激な資本主義化と都市化は、必ずしも社会と思想の近代化をとまなうものではなかった。政治と行政と軍事においてはなおユンカー層の支配はゆるがず、思想の面では啓蒙の完成者I. カントを生みながらも、ナポレオンの侵入はJ. フィヒテの国家重視をへてG. ヘーゲルの市民社会批判と、その批判的克服者のK. マルクスの資本主義批判をもたらし、さらにドイツ帝国の興隆は国家学の優位と、これと結びついた歴史法学と歴史派経済学を出現させた（21）。

それでもなお資本主義の発達と労働者階級の増大とは、一方では資本家と中産層を中心としていくらかの自由主義的な雰囲気をもたらし、これを反映して哲学では新カント派が出現し、他方ではドイツ社会民主党が労働者階級を中心に支持者をあつめ、マルクス主義がアカデミズムにおいても注目されつつあった。

「社会学という学問がつねに掲げる要求は、19世紀になって個人の利益にたいして大衆がかちとるにいたった実際の勢力を、理論的に継承し反映することなのである」（G；1）。以上のように激動する社会は、個人にかわって大衆を出現させ、まさに社会を問題とすることによって、社会学の出現をうながした。しかしドイツにおいては社会学は、それがコントやスペンサー

の名と結びついた外来の科学であることに加え、さらに国家学の優越的な地位という状態においては、なお大学においては公認されず、ディルタイは、あの有名な『精神科学序説』において「歴史哲学と社会学とは現実の科学ではない」(11; 87) と社会学の科学性を否定した。このような状況のもとに、今日社会学の古典とされるテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、その副題を「経験的文化形式としての共産主義と社会主義」とせざるをえず、それを「純粹社会学の基本概念」と変えたのは、やがて彼がジンメルやウェーバーとともに 1910 年にドイツ社会学会を成立させたのちの 12 年の第二版においてであった (5 ; 下 221-2)。

### III. ジンメルの社会理論の展開

ジンメルが彼の社会学的な問題を最初に書物として提起したのは 1890 年の『社会分化論——社会学的・心理学的研究——』(B)であった。右のような状況を考えると、ディルタイと同じ大学の 32 歳の私講師が、たとえ副題にしても「社会学的」の名のつく書物を出版するには、それなりの理由があったはずである。まず考えられるのは、ここで対象とされたのが社会学、特にスペンサーによって論じられた「社会分化」であり、この問題はすでに彼が 88 年に論文「社会倫理的な諸問題への所見」(A ; 32-49) において「集団の拡大と個性の発達」について論じ、そこでは現代社会における集団の拡大が社会分化を促進し、個性を発達させることを明らかにしたが、彼はあらためてこの問題を「社会分化」を中心に本書において詳論しなかったからと考えられる。なぜ彼が個性と個人を問題にしたか。これにはドイツ資本主義の急速な発展にともなう個人主義的な雰囲気の出現とともに、そこにおける「異邦人」としての彼の地位も考えられる。

当時のドイツにおいて社会学が以上のような状況にあるだけに、ジンメルはまず社会学の正当化から出発しなけりなかつた。彼は第 1 章「社会科学の認識論」において、まず従来の社会実在論と社会名目論を考察する。なるほど社会実在論は、はじめて社会を科学の対象として社会学を成立させ

た。しかし諸要素の多様な相互作用からなる社会を統一的なものと考えるところに、複雑な問題を単純化するという誤謬におちいるとして、その例として「社会的な発展の法則については語るができない」(B; 9)と述べて、コントやスペンサーの研究の成果を否定する。さりとて個人のみが実在であるとする社会名目論からは、社会学の対象そのものが消滅し、社会学も成立しなくなる。ここから彼は社会实在論と社会名目論の双方を、過去の静的な社会において成立した概念实在論であると批判し、動的な現代社会においては「規則的な世界原理」として「すべてのものはすべてのものと何らかの相互作用の状態にあり、世界のあらゆる点と他のあらゆる点とのあいだには、作用力と往来する関係が存在する」ことを承認し、したがって「諸部分の相互作用がわれわれの社会と名づけるもの」(13)であるとする。

こうして「社会の心をその関与者たちの相互作用の総和へ分解することは、固定的なものや自己同一であるものや実体的であるものを、機能や力や運動へ分解し、さらにあらゆる実在のなかにその生成の歴史的な過程を認識しようとする、現代の精神生活一般の方向にあるものである」。したがって「社会という統一体がまず存在して、その統一的な性質から諸部分の性質や関係や変化が生じるのではなく、むしろ諸部分の関係と活動とがあり、これらにもとづいてはじめて統一体について語るができる」(14)ことになる。

社会を諸要素の相互作用とみるこの見解は、社会学を理論的に基礎づける有力な立場のひとつになったが、それはまたジンメルの問題、個性の発達と個人の生存の問題にとっても、戦略的にきわめて有効であった。『社会分化論』は、社会分化を対象とはしながらも、「社会学的な思考に最初の客体として提供される集団全体の運動とは逆に、以下の考察は、実質的には個人の地位と運命とをとりあげ、個人を他の個人とともに社会的な全体に結合する相互作用によって、いかにして個人にその地位と運命とがあたえられるかを示そうとするものである」(20)と述べて、実際の問題が集団よりはむしろ個人にあることを示す。そして彼は、この相互作用をしばしば「社会的な糸」、個人をこれらの糸の「交点」と表現し(30、44、103、……)、この交

点、すなわち個人を中心として社会的な糸の張りめぐらされた範囲、すなわち直接あるいは間接の相互作用の範囲を「社会圏」あるいはたんに「圏」（37、52、57、61、……）という言葉で示す。この社会圏あるいは圏は個人の所属集団と同様に使用されることもあるが、いずれにせよこれが拡大して社会分化が増大すれば、個人に交わる糸も増大し、それとともに同じ交点はありませんくなり、まさに個人は個性となり（104）、そこに交差する相互の引力、交差圧力のもとに個人は自我をより強く自覚するようになるであろう（103）。

『社会分化論』はこれらの問題をさまざまな角度から考察し、多くの好意ある評価をえたが、F. テンニエスは、社会学の方法論的な基礎づけが十分ではないと指摘した（23；269）。時あたかも新カント派を中心に精神科学あるいは文化科学の理論的な基礎づけが問題となっていたときでもあり、経済学が「経済的なもの」を、政治学が「政治的なもの」を研究対象とするとすれば、社会学もまた「社会的なもの」を研究対象としなければならない。すでに人びとの相互作用を社会とみなすジンメルは、相互作用が一定の様式のもとに行われていることに注目し、これを「社会化の形式」と呼び、これが経済や政治とは区別される真に「社会的なもの」であり、社会学はこれを研究対象とすることによって、他の社会諸科学から区別される専門科学になることができるとし、このことを1894年に「社会学の問題」（D；271-7）に発表した。

すなわち相互作用あるいは社会化は、愛情あるいは憎悪といった動機づけから、もしくはさまざまな関心や目的の実現をめざして行われるが、それらが相互作用であるかぎりには、一定の形式のもとに生じる。ある経済的な目的が、あるばあいには人びととの共同の形式のもとに、他のばあいには競争の形式のもとに行われ、また経済的な目的を実現するための企業と、政治的な目的を達成するための政党に、同じような上下の関係がみられ、企業あるいは政党が、それぞれの目的を達成するために、これまた時にたがいに協力することもあれば、闘争しあうこともある。このような形式のもとに行われる経済

そのもの、政治そのものは社会化の形式をつうじて実現される内容として、経済学あるいは政治学の研究対象である。しかしそれらが行われるばあいの人びとの上下の関係や競争もしくは闘争といった社会化の形式そのものは、「社会において『社会』であるもの」(275)として社会をまさに社会たらしむるものでありながら、従来はいかなる科学の対象ともされなかった。社会学はこれを研究対象とすることによって、他の社会諸科学から区別された独立の科学、真にその名にふさわしい社会学となることができる。

もちろん、社会化の形式は、それによって実現される経済とか政治といった内容とは現実には不可分である。しかし科学は、ある観点からの複雑多面的な現実の抽象において成立し、幾何学が、化学や物理学などの対象ともなる物質の空間的な形式のみを対象として成立し、言語学が、さまざまな意味内容をもつ言語の形式のみを対象として成立するのと同じように、社会学もまた社会的現実から社会化の形式を抽象的に抽出して、それを対象とすることによって社会学となることができる。

この論文はきわめて短いものであり、社会学はたんに社会化の形式のみを固有の研究対象とすることによって独立の科学となりうることを主張するのみであったが、社会学の固有の対象への要求は各国の社会学者にも共通の関心事でもあり、多くの人びとに注目され、同年にはフランス語に、翌年には英語に、次いでロシア語とイタリア語に訳出された。

ジンメルによるこの形式社会学の成立は、社会学史上の記念すべき出来事であったが、ジンメルを社会学へ促した問題そのものにとっては、必ずしも好ましい結果とはならなかった。というのも彼の問題は、すでにみたように現代の分化社会における個人にあったが、個性の発達をうながす「社会分化」そのものは、『分化論』で述べているように「实在の根源的な諸力から生じたある現象のたんなる表示」(B; 10)であり、「社会的な発展」と同様に複雑な現象であり、研究対象を社会化形式へと限定された社会学の立場からは取り扱えないことになる。そのためジンメルの形式社会学の成立は、ジンメルの問題を二つに分化させることになった。すなわち一方では「社会学



の問題」に示した社会化形式を対象とする形式社会学的な諸問題の考察であり、他方では社会分化のより詳細な包括的な考察である。

形式社会学的な諸問題の考察は、94年以降の諸論文に精力的に発表され、やがて1908年に『社会学、社会化の諸形式についての研究』の大冊にまとめられるが、社会分化の考察は実はこれよりも早く、1900年に『貨幣の哲学』に結実した。これは序言の示すように、「実証的知識のつねに断片的な内容が、究極的諸概念によってひとつの世界像にまで仕上げられ、生と全体と関係」(E; V)づけられる哲学的な考察ということになる。

ところで本書がなぜ「貨幣」の哲学であるのか。序言は「貨幣は、もっとも外的な、もっとも現実的な、もっとも偶然的な諸現象と、現存在のもっとも観念的な諸勢位や個人的生活と歴史のもっとも深い諸潮流とのあいだに存在する諸関係の叙述のための、たんなる手段、素材あるいは例証である」

(VII)という。しかし問題は、なぜ貨幣が手段あるいは素材として選ばれたかである。これへの回答は『分化論』に示され、貨幣は「分化過程より生じたもの」(B; 123)であり、「潜在性の意味での分化のもっとも完全な並存」(144)とされ、したがって貨幣は社会分化を顕在化させるであろう。要するに貨幣は社会分化の所産であるとともに社会分化を促進する。本書は全体としては6章からなり、第1部の分析編と第2部の総合編とに別れるが、第1部の3章は貨幣がいかに社会分化の所産であるかを考察し、第2部の3章は貨幣がいかに社会分化を促進するかの考察にあてられる。

したがって本書は、貨幣を素材とする現代社会の分析であり、マルクスが資本主義社会の階級対立を分析するのに資本を素材とするのがふさわしかったように、ジンメルにとっては現代の分化社会を分析するには、貨幣がもっともふさわしかった。そして注意しなければならないのは、方法論的には本書の「根本意図」は「史的唯物論を基礎づける」ことにあり、「経済生活を精神的文化の原因のひとつに数えることにはその説明価値を認めるが、しかしほかならぬその経済的形態そのものがより深い評価と諸潮流の結果であり、心理的、いかなる形而上学的諸前提の結果であるということが認識される」

(E；Ⅷ)と述べていることである。この文章を、本書で言及している唯一の書物がマルクスの『資本論』であること(476)と併せ考えれば、ジンメルが本書で意図したものが何であったかも明らかであろう。

こうして本書は、第二次産業革命をほぼ終えた「豊かな」現代社会の包括的な考察といえる。『貨幣の哲学』の題名は、同時のドイツで支配的であった新カント派の影響のもとに、個別専門科学としての「形式社会学」を考え、ジンメルが、この形式社会学や経済学などの専門領域をこえた包括的研究、現代の用語にすれば学際研究、あるいは総合研究としての「現代社会論」につけた名称にほかならない。そしてイギリスの第一次産業革命の終了時に書かれたマルクスの『共産党宣言』(1848年)が、当時としてはイギリスを除けばヨーロッパの人口の約3分の2がなお農村で農業に従事していたときに書かれながら、その後の資本主義の分析に久しく有効であったように、第二次産業革命に先んじたドイツのベルリンで書かれた本書は、その後の「豊かな社会」とそこにおける個人の生存のすぐれた考察であり続ける。このことは1978年に英訳が出版され、これが本書をひろく再認識させ、1984年にはイタリア語、1987年にはフランス語に訳されたことにも示されよう。

他方の形式社会学的な考察は、1908年に『社会学』へとまとめられた。これは10章からなり、題目の示す多様な社会化形式を取り扱い、すでに発表された論文からなるため、たんなる論文集と理解されることが多かった。しかし注意しなければならないのは、それぞれの題目の示す社会化形式の考察が、個人の個性化と自由の増大を促進する社会化形式の考察を含み、むしろ焦点がその形式へあわされ、さらに各章が終章の「集団の拡大と個性の発達」へ収斂するというふうに構成されているということである。いわば本書は、各章がそれぞれの題目の社会化形式を考察し、したがって独立した分析として読むこともできるが、しかし全体としては、各章がいわばそれぞれ独立の河川が大海へ流入するように終章へ総括されるといった構造を示している。

ところで本書のこのような統一的な全体としての構造を見誤らせるものと

して、いまひとつ注意しなければならないことがある。それは典型的な事例についてのジンメルの考察方法である。ウェーバーが研究対象の個性もしくは特性を明らかにするのに理想型を使用したとすれば、ジンメルは対象の可能性を極端な典型的な現実の事例によって示そうとした。しかもウェーバーのばあい、理想型について詳しい説明がされているが、ジンメルのばあいは、これについての特別な説明はまったくなく、このことが彼の考察を断片的と考えさせる理由のひとつとなっている。たとえば第5章で論じられる「秘密」は、ほぼすべての人間にみられる自己隠蔽の典型的な極端なばあいであり、同じ章の補説で論じられる「装身具」は、これまたすべての人間の多少とも示す自己誇示を典型的に示すものにほかならない。

同じことは第7章の「貧者」や第9章の補説「異郷人」についてもいえ、それぞれはこれまた人間が自己の所属集団にたいしてもつ二重の地位、その集団の「内と外」の地位、一部は集団に所属するが一部は集団外にとどまることの極端な典型例にほかならない。それぞれの分析にこのことが示されているが、それぞれが深い洞察とまとまりを示すため、独立した分析としても理解され、本書は全体としては論文集であって、統一性を欠くものともされる。歴史学から社会学へ入ったウェーバーが、研究対象の個性を明らかにしようとして理想型をもちいたのにたいして、哲学と心理学から個人を問題にして社会学へ入ったジンメルが、個人の自由な生存の可能性を考え、極端な典型例を考察の対象としたということは、両者の理解とともに両者の相違を知るうえに重要であろう。

『貨幣の哲学』の発行とともに、そこで考察した現代社会の豊富な文化の考察を契機として、ジンメルの関心は文化と生の問題へと向かい、この研究が社会学的な研究といわば相互作用しながら進行し、『社会学』の発行の後には主として文化と生との哲学的な研究へ傾き、社会学的な研究は1917年の『社会学の根本問題』(I)、生の哲学的な研究は1918年に『生の哲学』(J)にまとめられた。前者の副題「個人と社会」は、社会学の一般的な根本問題でもあるが、同時にまたジンメルの社会学的な考察をつらぬく問題で

もあり、この問題が後者の最後の第4章の「個性的法則」(J; 150-239)へとつながる。

#### IV. 形式社会学における「心理学的な顕微鏡」と「現象学」

以上に概観したジンメルの社会理論において従来主として強調されたのは、彼の「社会化の形式」であった。コントやスペンサーなどの社会学の創始の第一の世代にたいして、ジンメルやデュルケムなどの第二の世代を特徴づけるのは、彼らが第一の世代の総合社会学にたいして社会学の研究対象を明確化して、社会学を他の社会諸科学とは区別される固有の専門科学として成立させたことにあった。そしてこの点においてジンメルは、社会学の対象を社会化の「形式」とすることによって、もっとも顕著に第二の世代を代表した。ジンメルにおいて社会化の形式が強調されるのも当然であろう。

しかし注意しなければならないのは、「社会化の形式」は「社会化」の形式であり、ジンメルが人びとの「社会化」、すなわち諸要素の「相互作用」を社会とみなすことによって、従来の社会実在論と社会名目論を克服したということである。こうして彼は社会をまず相互作用、つまり社会化という動的過程として把握し、しかも現代社会を「分化過程」にあるものと考え、そこで個人の「生存」と個性の「発達」を問題とした。もちろん科学はなにほどこか一般的なもの、恒常的なものを対象としなければならない。そのため社会学もまた、なにほどこか一般的、恒常的な社会化の「形式」を対象とせざるをえない。しかしこの「形式」は、動的な「社会化」の形式であり、しかもその社会化の現実の主体は個人であり、この個人こそはまさに個性を「発達」させるものとしてジンメルの問題の中心であった。してみればジンメルのばあい社会学の対象としての「社会化の形式」は、さまざまな相互作用の「社会的な糸」が、個人というそれらの「交点」にいかにかまじわるかを問題とするものであり、彼の「社会化の形式」への注目は今日の言葉で表現すれば、社会の巨視構造ににたいする微視過程の重視ということになる。したがってジンメルについては社会化の形式とともに、またこの微視的分析につい

でも考察しなければならないであろう。

ジンメルのこの微視過程の重視は、すでに『分化論』にはじまるが、社会学の対象を「社会化の形式」とした『社会学』においても、次のように強調される。

「ここで問題となるのは、人間質料の内部のいわば微視的・分子的な過程である。しかもこの過程は現実的な生起であって、これがまずは一緒につき合われ、あるいは実体化されて、あの巨視的な固定した統一体となる。人びとがたがいにまなざしを交わしあい、相互に妬みあい、彼らがたがいに手紙を書き交わしたり、あるいは昼食を共にし、またいっさいの具体的な利害のまったくの彼方でたがいに同情して触れあったり、あるいは反感をいだいて接触しあい、利他的な行いにたいする感謝によって裂くことのできない結合的な作用が存続したり、ある者が他者に道を尋ねたり、あるいはたがいに着飾って装いをこらしたりすること——これらの例は無数の関係からまったく偶然に選ばれたものであるが、このような関係はすべて人から人へと演じられ、瞬間的であろうとあるいは永続的であろうと、意識されているとあるいは意識されないままでであろうと、また一時的であろうとあるいは影響の多いものでであろうと、われわれを絶え間なく一緒に結びつける。あらゆる瞬間にもそのような糸が紡ぎあわせられ、編み目が落とされてはふたたび拾いあげられ、他の糸と取りかえられて他の糸と織りあわされる。ここでは社会の原子のあいだに、たんに心理学的な顕微鏡のみにとらえられる相互作用が横たわり、この相互作用は、きわめて明白であるとともにまた謎にみちたこの社会生活の完全な強靱性と弾力性、完全な多彩さと統一性とをそなえている」(G; 15)。

社会が人びとの相互作用であるかぎり、われわれがまず体験するのは決して家族や都市、企業や国家ではなく、妻や兄、路上で行き交う人や会社の同僚と上司、このような人びとへの働きかけと、彼らからの働きかけ、つまりは相互作用である。これらが継続的にくりかえされることによって、人びとのなかに家族や会社といった統一体も考えられるようになる。かつて医学

において心臓や胃腸といった大きな器官が生命を維持するとみなされていたが、顕微鏡の発見とともに生命の維持は、むしろ細胞のあいだの無数の相互作用によることが明らかになった。同じように社会においても家族や企業、政党や国家が社会をなし、これらから個人が形成されるのではなく、むしろ人びとの日々の相互作用があり、これらによって家族や企業も形成され、一般に社会が成立する。したがってジンメルは「人間のあいだのしなやかな糸、微細な関係を発見することが問題」(16) であるという。

そのために必要なのは「心理学的な顕微鏡」であるが、これはこれまでのところまだ残念ながら発見されていない。「まったく第一次的なこの過程は、直接の個人的な質料から社会を構成するのであり、それゆえより高度で複雑な経過と構成体とならんで、形式的な考察にゆだねなければならない。そして特別な相互作用は、理論的な視線にはまったくなじまないこの程度においてあらわれるが、社会を構成する形式として、社会化一般の部分として吟味されなければならない。さらに、この外見上は無意味とも見える関係様式には、社会学が以前にはそれを見すごすのをつねとすることが多ければ多いほど、それだけいっそう徹底的な考察をささげるのが目的にかなうであろう」(16)。すなわち微視過程はこれまで「理論的な視線にはまったくなじま」ず、「外見上は無意味とも見え」、「社会学が以前にはそれを見すごすのをつねと」したとすれば、既成の概念と方法には依存できず、新たに「心理学的な顕微鏡」を発見しなければならないことになる。

ところがジンメルはどこにおいても、この微視過程への「心理学的な顕微鏡」を説明してはいない。それに相当するものとしては後の『社会学の基本問題』において説明される「距離」があげられる。物体はそれを見る者との「距離」によって異なった姿を見せるが、同じことは人間と社会についても同じであり、「ある範囲の人間の存在を『近づいて』みると、各人が他の者とははっきり際立って見えるが、観点を遠くすれば、個人そのものは消え失せ、『社会』の形象が独特の形式と色彩をおびて現れる」(Ⅰ；10)。では相互作用を考察するにふさわしい距離はどれほどか。個人のみの際立つ至近距

離でもなければ、「社会の形象」が見える遠くからでもないことは明らかであるが、その距離は明示されてはいない。ところが『哲学の根本問題』においても、認識の「距離」についてほぼ同じ説明がされ、ここでもまた具体的な距離のとり方については述べられていないが、「鷹の目のように鋭い視力」(H; 36) が新たな視座を開くとされていることに注意したい。日々の相互作用は日々の日常事であるだけに意識されることもなく、まったく常識的に処理され、あらためて考察されることもない。しかしそれだけに、ここにわれわれが相互作用を「社会を構成する形式として、社会化一般の部分として」意識し、考察しようとする視座そのものが、おのずと対象との適当な距離をもたらし、「心理学的な顕微鏡」への焦点をあわせることになる。

このように彼は「心理学的な顕微鏡」について語りながらも、具体的にそれへの焦点のあわせ方については説明していない。しかし彼はそれでも社会化の諸形式の考察にさいして、この顕微鏡をつうじての具体的な微視過程を示してくれる。事実ジンメルが彼の膨大な『社会学』において考察の対象としているのは、通常社会学書の目次にみられる家族と地域社会、企業と組合、政党と国家といった制度や集団などではなく、それらも言及されているものの、それらを形成する相互作用の形式、つまり上位と下位、結合と対立、競争と闘争といった「社会化の形式」であり、そこにおいてあくまでも重視されるのは相互作用の微視過程である。したがって、これをたどることによってわれわれは、逆に「心理学的な顕微鏡」がいかなるものであるかを知ることができる。

まず社会を社会とする人びとの「相互作用」は、その当事者の「一定の衝動からか、あるいはたんなる社交的な衝動、防御と攻撃といった目的や、さらに遊戯と営利、援助と教授、さらには他の無数の目的が原動力」(G; 4) となり、それぞれ相手にたいして行われる。説明の便宜のため一方の行為者を中心に考察するが、まず彼は相互作用の相手に接して目や耳などによって感覚印象をうける。この感覚印象は第9章の「感覚の社会学についての補説」の示すように、「二つの方向に向かって展開」(438) する。それは一

方では快や不快、興奮もしくは鎮静などの「感情をひきおこす」が、他方では「他者の認識の手段となる」(484)。注意しなければならないのは自然物のばあい、これらの感情と認識作用とが明確に分離するのにたいして、人間のばあいは双方が相互にからみあって作用することである。

この他者への認識作用は、こうして相手への感情によって影響されながらも、第1章の補説「いかにして社会は可能であるか」(21-31)の示すように、認識者にそなわるアプリアリによって相手の属する役割類型と相手の個性、そしてそれらの総合としての特定の相手の認識に到達する。

相手にたいするこの認知にもとづき、むしろ認知とともに相手への行為がおこなわれる。ここで行われる行為が、一定の様式にしたがって行われ、これが社会化の形式をなすわけであり、ジンメルはとりあえずここでは社会化の形式として「上位と下位、競争、模倣、分業、党派形式、代表、内部への結合と外部にたいする閉鎖の同時性」(7)などをあげる。それらの諸形式の考察は各章にみられ、ある程度は周知のことでもあるので、以下ではそれらの諸形式にほぼ共通にみられる相互作用の微視過程そのもののみに注目する。

相互作用の形式が闘争と協力、上下関係と競争のいずれであれ、相互作用の反復と関係の緊密化とによって相手への認知も深まり、認知が深まることによって関係も緊密化する。「こうしてわれわれの関係は、お互いについての相互の認識にもとづいて発展し、さらにこの相互の認識は、事実上の関係にもとづいて発展する」(258)。しかもこの相互作用は愛情と憎悪、好意と嫌悪などの「混合感情」によって方向づけられ、たんに「好意」や「愛情」が増すことによって親密さが増大するのではなく、親密な親友や恋愛の関係においてさえなにほどかに反感や抵抗も存在する。「愛すればこそ、憎さもつのる」(「花の素顔」)とは流行歌の歌うところであり、この感情の微妙な混淆たる「混合感情」(191)は、親友や兄弟などとの関係を顧みれば明らかとなろう。こうして相互作用は「多様な心の諸要因の協奏曲」(192)として形式される。



そして相手にたいする行為は、この「混合感情」とともにまた相手についての知識によっても導かれるが、この知識もこれまた真実と誤謬、知識と無知とのいわば「混合知識」であり、これをめぐっては「自己顕示」と「自己抑制」(269)、あるいは「自己吐露」(270)などから「欺瞞」や「虚言」(258)、「誇張」や「隠蔽」(262)も行われ、あるいはまた「遠慮」あるいは「配慮」(265)も作用する。これらは意識的あるいは無意識的にさまざまな程度で行われる。こうしてわれわれの相手にたいする「知識は、独特の制限と歪曲によって特徴づけられる」(258)。にもかかわらず「各人は彼がかかわりをもつ他者を、交流と関係とが可能となる程度までは大体において正確に認知している」(256)。

このことは、相互作用の相手についての知識が相対的であり、異なることを示す。その知識がたんに関係の相違のみではなく、また関係の深さによっても異なり、さらに原理的には各人が個性であることにもよる。相手についての知識はこうしてたがいに異なり、しかも知識と無知との混合である。にもかかわらず人は、このように「大体において正確に認知してい」と考えて行為する。この行為を可能とするのは普通は意識されないが、ジンメルによれば相手への「信頼」である。信頼は「行動の仮説として、まさに仮説として人間についての知識と無知とのあいだの中間状態である。完全に知っている者は信頼する必要はないであろうし、完全に知らない者は合理的にはけっして信頼することはできない」(263)。相手についての正確でない知識が相手への信頼によって補われるわけである。

このような「混合感情」と「混合知識」との「混合」に、さらに関係と状況におうじて「慣習」意識や「道徳」意識、あるいは「権利」や「義務」といった規範意識が加わる。慈善や献金あるいは奉仕作業などの特定問題のばあいを除けば、意識されることは少ないにしても、やはりわれわれはこれらの規範の規制のもとに行動している。

ところで相互作用がこのように行われるにしても、それが存続するには、それを存続させるものが必要である。「社会的な結合は、たとえそれがいか

に成立したにせよ、その本来の結合的な動機とは独立して自己保存、つまりは形式の自己保存を発達させる。ひとたび確立された社会化のこの持続力が必要ならば、全体としての社会はあらゆる瞬間に分裂するか、さもなければ考えることもできない仕方に変化するであろう」(439)。「社会化のこの持続力」としては利害の打算や慣習、あるいは社会規範などもあげられようが、さらにジンメルがあげるのは第8章に補説として加えられた「誠実と感謝」とである。

「誠実」については、「心を一般にある道へと導いた衝動がすぎ去ったのちにも、なおひとたびとられた道を固執する持続力」(439)と説明され、その例として老いた妻にたいする夫の「誠実」な愛をあげ、愛がこのばあい「誠実」の形容詞を必要とするのは、最初「関係は身体的な美にもとづいて成立するが、その美が消滅したのちも、さらにはそれが醜惡へ移行したのちも大いに生きのびることができる」(339)からであるとされる。

「誠実」が関係を「固執する持続力」(439)であるとすれば、「感謝は人類の道徳的な記憶」(444)とされ、これは他者の「善行」にたいして「それに返礼することができないという意識において成り立つ」(446)。「なぜなら最初の給付には、反対給付にはもはや存在しない自発性が存在するからである」(446)。それは「道徳的な記憶」として「関係が久しく断絶した……後でさえ、その関係の観念的な存続である」(444)とされる。ジンメルはさらに誠実と感謝について興味ある考察を行い、ここでもまた「感謝の反応がすべて一挙に消滅するとすれば、少なくともわれわれの知っているような社会は崩壊するであろう」(444)という。

「混合感情」を構成する諸感情の混合の程度、「混合知識」の真実と虚偽の混合の程度、さらに両者の混合の割合は、当事者の関係の種類と濃淡とによって異なり、また行為に加わる規範意識も異なる。したがって行為者の相手にたいする行為は、一定の形式にしたがってはいるものの独自のものであり、それゆえにこそ相手によって彼の行為と認知され、それにおうじる反応を促す。こうして相互作用は、まさに行為者相互の心の相互作用として創造

の過程であり、関係と状況とにしたがって微妙に経過する。まさに「あらゆる瞬間にそれらは、展望しがたい豊富さと多様さで作用している」(9)。

もちろん現実のこの豊富さと多様さをそのまま記述することは、不可能であるとともに科学的には無意味でもある。科学は一定の観点と抽象とによって成立し、社会学は「社会化の純粹形式を確定し、それらを体系的に秩序づけ、心理的に基礎づけ、歴史的に展開すること」(7)を課題とする。にもかかわらず相互作用の多様さをジンメルによって紹介したのは、すでに述べたように相互作用そのものを彼にそくして考察することがさほどなされなかったからである。そしてまた何よりもジンメル自身がこのように相互作用の豊富さと多様さを深く洞察していたからこそ、彼の形式社会学が、その形式という名の連想させる静的な「形式」的性格を示すことなく、「社会化」という現実の流動的な脈動を伝えることができたと考えるからでもある。

なお、以上に考察した相互作用の経過は、各章のそれぞれの部分に散在するものをまとめたものであり、散在するそれぞれの部分はそれにふさわしい箇所におかれている。感情の問題は、悪意や憎悪といった感情が重要な作用をおよぼす闘争において、知識の問題は、それを前提とする秘密にかんして、社会規範の問題は、それを必要とする貧者の保護をめぐるなどである。もちろんそれぞれの説明はその部分のみに限られず、必要な箇所には必要な説明がされ、それだけに読み落としもあるだろう。だがまたそれだけにそれらは自然な叙述として、ここにまとめたような無味乾燥なものではなく、現実の生の脈動を伝えるものとなり、これは直接に読むいいにはあじわえないであろう。

これらの相互作用のそれぞれの箇所にある考察をつうじて、ジンメルがいかに相互作用の当事者の微妙な心的状態を考慮し、それへ「心理学的な顕微鏡」によって接近しようとしたかが伺われる。まさに社会的な相互作用は、個性的な心的な主体のあいだの相互作用であり、「社会一般」はまさしく「主観的な心の客観的な形式」(21)であり、創造の過程として主体と関係との異なるにおうじて異なる。これをジンメルによって見よう。

ある教師をMとし、彼の妻をA、彼のある演習学生をBとする。「いまAがMについてBがもっているのとは異なった表象をもつとすれば、このことは断じて不完全もしくは欺満を意味する必要はなく、むしろAがいやしくも彼の本質と総体的な環境とにしたがってMと関係するとき、Mについてのこの心像は、ちょうどBにとって内容的にはそれからは偏った心像とまったく同じように、Aにとっては真実なのである。これらの二つの心像をこえてMについての客観的に正しい知識が存在し、二つの心像はそれと一致する程度に応じて正当とされるといったことは、あくまでもありえない。たしかにAの表象のなかのMについての心像は、つねにたんに少しずつ真実の理想に接近するにすぎないが、むしろこの真実の理想もまた理想としては、Bのそれとは異なったものであり、それは統合的、形成的な前提として、AとMとが彼らの性質と運命とによってたがいに入りこむ特別な関係とを含んでいる」(257)。

MについてのAとBとの織りなす「社会的な糸」からなる社会は、まさにAとBとのそれぞれの「主観的な心の客観的な形式」であり、この「客観的な形式」は「主観的な心」と相互作用しあう。続けて読めば以下のような。「人間のあいだのいっさいの関係は、一方についての心像を他方のなかに生じさせ、そしてこの心像は明らかに右の現実の関係と相互作用している。すなわちこの現実の関係が前提をつくり出し、この前提にもとづいて一方の他方についての表象があれこれと生じ、さらにこのばあいに正当とされる真実性をもつ。ところが他方において諸個人の現実の相互作用は、彼らのたがいに手に入れた心像にもとづいている」(257)。相互作用しあう各個人がそれぞれ個性をもつかぎり、ある個人がさまざまな人びととの相互作用をつうじて織りなす彼の社会圏、つまり彼の現実の社会は独自のものである。これは、彼が他者と共通の概念と言語によって他者たちとコミュニケーションして築きあげた彼の知的世界が、他者のそれと共通な基礎にもとづきながらも、彼の独自のものであるのと同じである。

相互作用の微視過程へのこのような接近への努力にくわえて彼は、現実の社会化の形式の考察について「直感的な処理」(12)、あるいは「ある程度の直感的な処置」(13)を避けえないという。それというのもこの「社会化の形式」の考察が、「これまで未開拓であった領域」、複雑な流動する社会的現実を対象とするだけに、幾何学のばあいのように物体から抽出したその空間的な形式が同等ではなく、なにをどのように把握すべきかについては「疑う余地のない杷子が欠け」、必ずしも明確ではないからである。このような処理あるいは処置は、ある程度は以上にみた相互作用の微視過程の考察にも見られ、ここでは「直感的な心理学による模写」(17)について述べるなど、さらに研究対象の考察全体についても妥当するであろう。そしてジンメルがこの直感的な処置の範例としてあげるのは、芸術である。彼は『貨幣の哲学』において「生のあらゆる個性性において生活の意味の全体を発見する」には、「哲学にたいする芸術の巨大な利点」が考慮されるとして、次のように述べる。「芸術はつねに一定の人物、風景、情趣といった個々の狭く局限された問題に向かい、そしていまやその問題の普遍的なものへのすべての拡張を、世界感情の大きな流動のあらゆる付加を、その豊富化、贈物、いわば過分な幸福享受のように感じさせることである (E ; VIII) と述べて、「哲学」と名づける書物においてこのように「芸術」を範としようとする。

また他のところにおいては次のように述べる。「美的な考察と叙述の本質はわれわれにとっては次のことにある。すなわち個別的なもののなかに典型が、偶然的なもののなかに法則が、変化する外面的なもののなかに事物の本質とが現れるということである。いかなる現象も、事物において意義のある永遠なものへのこの還元を避けることはできない」。したがってここでは「世界観は美的な汎神論となり、あらゆる点が、絶対的な美的な意義の解放の可能性を秘め、十分に鋭い目には、それらのあらゆる点から、世界全体の全体的な美が、全体的な意味が明らかになる」(C ; 198-9)。

ここに見られる芸術的な表現は、事物からうけた印象を既成の形式によらないでそのまま表現することによって、事物の本質に迫ろうとする印象主義

の方法であり、これにならおうとしたジンメルはこれに成功したようであり、人は彼の具体的な業績を、芸術作品と評し、彼を「印象主義者」とする。H. フライヤーは「結局は彼の社会学はもっとも美しい個人的な芸術作品であるといえることができる」(12; 56) と書き、K.H. ヴォルフもまたジンメルの著作を「芸術の作品である」(27; xi) と書いている。そしてジンメルの教えをうけた K. マンハイムはジンメルについて、「彼は、以前には観察されなかった大気の影響や価値を映しだせるようになった現代の印象派の絵画のもつ特徴と同様の正確さでごく単純な日常的経験を描写する能力をもっていた。彼は社会学における『印象主義者』と呼ばれてよいであろう」(19; 217) と述べ、これまた若き日にジンメルに魅せられた G. ルカーチも次のように書く。「彼は印象主義の哲学者である。音楽と造形芸術と詩の印象主義的発展の表現したものを、彼はたんに概念にもたらしたのみではない。彼の労作は、印象主義的な世界観の定式よりもはるかに大きい」(18; 172)。そして彼は続けてジンメルを「哲学者のモネ」(173) であると書く。

ところでフッサールの現象学に始まる社会学の現象学にも、さまざまな流れがあるようであるが、フッサールの「事象そのものへ返れ」は、また「現象そのものへ返れ」であり、人びとが日常の生活によってつくりあげている社会生活を、先入観を排して正確に理解し、記述しようとするものであり、そのかぎりは以上にみた「未開拓であった領域」への「鷹の目のように鋭い視力」は、芸術上の印象主義にならう「鋭い目」による対象への接近と同じである。そしてジンメルが研究対象にたいして意図したのがこの印象主義的な把握であり、この意図の成功がすでに多くの人びとによって承認されるとすれば、ジンメルの研究がまた、社会学上の現象学的な先駆であったとする評価も当然ということになる。こうして R. メインツは、ジンメルが「強く現象学的な傾向をもつ」(20; 256) ことを指摘し、M. カーンは「ジンメルの哲学の現象学的な基礎」と「現象学的社会学」(16; 75) について語り、D. フリスビーもまたジンメルのさまざまな社会的な研究が「現象学的な社会学への豊富なパラダイムである」(14; 15) という。

## V. 「大都市と精神生活」における「モデルネ」

以上においてわれわれはジンメルのいわゆる微視社会学が、現代において一部から「現象学的社会学」の先駆であるとされることをみたが、次にここではこの現象学的社会学が、現代の人間と社会とを研究対象とするとき、これは「モデルネの社会学」となることを、ジンメルの論文「大都市と精神生活」において考察したい。

まずモデルネの概念であるが、これは C. ボードレールによって提起され、フランクフルト学派、とえいわけ J. ハバーマスによって現代批判と関係して問題とされ、一般化するようになり、現代社会における「新しい」もの、現代的なもの、それについての人間の体験、その体験の様式をさす（9；9-16、13；11-37）。したがってこれは、歴史学や社会学における「近代化」あるいは「現代化」の理論と関係するにしても、必ずしも同一であったり、重なったりはしない。われわれはたとえばテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（5）を、「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」として読み、近代化の定式のひとつとして理解するが、前者から後者への変化が意志の変化へ還元されることによって、ゲゼルシャフトの部分も人間と社会との現代的な生活様式を明らかに提示しているとはいえない。同様なことは E. デュルケムの『社会分業論』（4）の「未分業社会から分業社会へ」あるいは「機械的連帯から有機的連帯へ」についてもいえるであろう。

ところでここで問題とするジンメルの「大都市と精神生活」であるが、題目からすれば彼には珍しく大都市といった地域社会を問題としているかに思われる。しかしやがて明らかにするように、問題はむしろ「精神生活」にあり、ここには通常は都市を問題とするさいに不可欠な都市の構造や機能についてはほとんど述べられてはいない。実は彼は「大都市の精神生活」によって、「現代社会の人間」の「精神生活」を明らかにしようとした。ここにすでに指摘した彼の方法、極端な典型的な例によって問題を考察するという方法のひとつの例が示される。このことは、この論文の最後の注記に、典拠と

して『貨幣の哲学』をあげ、内容がほぼ『貨幣の哲学』の第6章に大きく依存していることと、本論文の書き出しとに明確に示される。書き出しはジンメルの当時の問題とも関係するので示せば、こうである。

「現代生活のもっとも奥深い問題は、社会と歴史的遺産との、外面的な文化と生活技術との優勢にたいして、自己の生存の自立性と特性とを保持せんとする個人の要求に発している。——これは、未開の人間が身体的な生存のために行わねばならなかった自然との闘争が最近に到達した変形である。18世紀が、すべての人間において同じである根源的に善き性質が妨げられることなく発達するように、国家と宗教、道徳と経済において歴史的に成長したすべての拘束からの解放をよび起こしたとしても、19世紀がたんなる自由とならんで人間と彼の業績との分業的な特性を要求し、これが個人を比類なきものとし、できるだけ不可欠なものとはしたが、しかしこれによって彼をすべての他者による補足に緊密に依存させたにしても、またニーチェが諸個人のもっとも無情な闘争に、あるいは社会主義がまたあらゆる闘争の抑圧に、個人の完全な発達のための条件をみるにしても、——これらのすべてに同じ根本動機が作用している。すなわち社会的・技術的な機構において平準化されまい浪費されまいとする主体の抵抗である。」(F; 227)。

これは都市についての論文の書き出しとしては、なんとも大げさであるが、実はこれはジンメルの問題、現代分化社会における個人の問題の、この段階での表現であり、この問題を彼は、現代分化社会の典型としての「大都市」において検討しようとし、この意図がはからずもこの文章となってここに示されたわけである。したがってこの論文は、「大都市」の精神生活を対象とはするが、現実には「現代人」の「精神生活」であり、これが現象学的の考察されれば、まさしく「モデルネ」の社会学となるはずである。

さて論文の内容はおおきくは二つに分かれ、前半は大都市における個人の生存の様式の考察にあてられ、後半はそれがいかにしてそうなり、それがいかなる問題を提起するかの考察にあてられ、人間の自由が論じられる。



先ずジンメルは「大都市的な個性の類型が現れる心理学的基礎は神経生活の高揚であり、これは外的および内的な印象の迅速な交替から生じる」(227-8) という。大都市に密集する多数の人間と豊富な財貨とその急速な変化は、慣れ親しんだ静的な田舎や小都市の生活に比してわれわれにきわめて大きな刺激をあたえる。なぜならわれわれは「区別する存在者」(228)であり、刺激の強さもさることながら、むしろその変化にたいしてより敏感だからである。してみれば大都市人はこれらの刺激にたいして、「防御器官」(228)をつくりださなければならない。すなわち「悟性」による対応であり、情意が人格の根底にねざしているのにたいし、悟性は人格の根底からもっともへだたり、心の透明な表層によこたわり、それだけに外的刺激にたいしてもっとも適応能力をもつ。こうして外的刺激による「意識の高揚が、この悟性に心的な特権をえさせる」(228-9) ことになる。

この大都市人の「悟性的態度」は、外的な激しい刺激の「圧政」にたいする「生の予防薬」(229)として承認されるが、大都市はまた貨幣経済の場でもあり、こうして大都市は「貨幣経済と悟性の支配」(229)によって特徴づけられる。そしてこの両者に共通するのは、人間と事物の処理における「純粋な没主観性」(229)であり、そこには「形式的な正義が容赦のない冷酷」とむすびついている。田舎の人間関係がたがいの個性にもとづき、情意のうえにきづかれていたのにたいし、大都市において人は「個人的なもののすべてにたいして無関心」であるからであるが、このことは個性的なものが貨幣による評価には入らないことに明確に示される。こうして悟性と貨幣とは、すべてを「平準化する」(229) ことになる。

悟性と貨幣経済は市場生産を一般化し、生産者と買手との個人的な関係を切断して、「主知主義」と「経済的な利己主義」(230)とを相互作用させながら浸透させる。こうして「現代的な精神はますます計算的」(230)となり、「質的な価値の量的な価値への還元」が行われ、複雑で多様な生活諸関係も「貨幣の計算的本質」に対応して、「正確性」と「確実性」と「一義性」を要求され、生活一般はいわば「超主観的な時間表」に配列されることになる。

そしてここに生じた「正確性と計算可能性と精密性」(231)とは、ますます生活の非合理的なもの、本能的なもの、感情的なもの、自立的なものを排除し、生活はより計画的に、合理的に形成される。ジンメルは他のところではこれを「都市の本質」として「被構成性」(G ; 477)と名づけている。

大都市の外的な多様な刺激にたいする第二の「防御器官」としてあげられるのは「倦怠」である。「おそらく倦怠ほど無条件に大都市に留保されている心的な現象はけっしてないであろう」(F ; 232)。大都市の外的な刺激は、その多様性と変化の急速性と対立性によって、われわれの神経のそれにおうじる反応を要求し、神経をこなごなに引き裂くであろう。してみればここに要求されるのは、「新しい刺激にふさわしいエネルギーで反応できないという無能力」であり、これが倦怠である。そして「倦怠の本質は事物の相違にたいする無感覚」であり、これはまた「貨幣経済の正確な主観的な反映」でもある。なぜなら「貨幣は、もっとも恐るべき平準器となり、事物の核心、その特殊な価値、その無比性を望みなきまでに空洞化する」(232-3) からである。

こうして倦怠は、大都市の巨大な外的刺激への反応の拒否であるが、それは外的世界を無価値にするという代償によってえられ、これはまた結局は「自己の人格をも不可避免的に同じ価値剥奪の感情へとひき下げる」(233) ことにもなる。

これとならんで「大都市人のたがいの精神的な態度は、形式的な点において冷淡と名づけてよいであろう」。人は大都市において、多数の人びとに田舎と同様に対応すれば、「内的に完全に原始化」せざるをえない。これを避けようとすれば人は、他者一般への「不信への権利」(234) とともに知人にたいしても「冷淡」たらざるをえない。これが「小都市人にはわれわれをしばしば冷酷で無情と思わせる」。そしてこの「冷淡の内部」は、「しばしばかすかな嫌悪でもあり、相互の疎遠と反発と」であり、これは時に「ただちに憎悪と闘争となる」(234)。

もちろん拡大した交流生活の内部がすべて冷淡な関係というわけではない。

それは「束の間あるいは持続的な同情、無関心、嫌悪のさまざまな段階にもとづ」(234)き、このうち無関心は意識されるほどには大きくはないが、刺激の多様性と変化とが、反応を無関心へ解消する。そしてこの無関心と外的な暗示の朦朧性とが、かえって反感をひき起こし、これが距離と回避をもたらす。これらのさまざまな「程度と混淆、その出没のリズム、それを満足させる諸様式、——これが、狭義の統一化的な動機とともに、大都市の生活形態の不可分な全体を形式している。大都市の生活形態において直接には解体と見えるものが、こうして現実においてはその根本的な社会化形式の一つにほかならない」(234)。

以上のような大都市人の周囲の人のびとへの対応態度がいかにして形成されたか。ジンメルはそれを「社会進化」にともなう集団の拡大によるとして、次のように述べる。

「集団が大きくなるにつれ……集団の直接の内的な統一性が緩み、他の集団にたいする本来の限界づけの鋭さは、相互関係と連結とによって緩和される。そして同時に個人は活動の自由を獲得するが、これらに機会と必要とをあたえるのは、大きくなった集団の分業である。この公式にしたがって国家とキリスト教、同業組合と政党、さらには無数の他の集団が発達する」(235)。要するに集団の拡大は、競争による分業と社会分化とによって一方では個人の個性を発達させ、自由とを増大させ、他方では多様な機能集団を出現させ、増大させ、そして社会進化のこの両方向は、相互作用しながら進行する。

この「社会進化」の先端にあるのが大都市であるとすれば、そこにこそ「個性の発達」も顕著であり、個人はもっとも「自由」である。しかしこれは、実はすでにみた相互の冷淡によって支えられており、時としてその代償として「孤独」が要求される。「まさに大都市の雑踏のなかほどには孤独と荒涼とを感じないとすれば、これは明らかにたんにこの自由の裏面であるにすぎない」(237)。ところがこの孤独はまた、近接者との親密な非合理的な

関係の欠如、つまり「自由」として、「普遍的に人間的なもの」への結合を促す。こうして大都市は「個人的自由の場」であるとともに、「世界市民主義の場」でもある。狭小な圏では相互作用、つまり「社会的な糸」が近距離間にもみ紡がれていたのにたいして、ここではそれは関心と目的とにしたがって無限の距離へとひろがる。

「この点において生活の量は、きわめて直接的に質と性格へと変化する。」(237-8)。人びとの生活は、狭小な地域社会ではその領域内に閉ざされている。これにたいして大都市の生活は、その限界をこえて拡張し、「大都市のもっとも重要な本質は、物理的な境界をこえたこの機能的な大きさにある」(238)。これにおうじてここでの個人の「自由の本質はやはり、結局はそれぞれの人間がどこかに所有している特殊性と無比性とが、生の本性にしたがうということにある」。個人はいまや「自由」によって「他者との代替不可能性」を要求される。ところが大都市の「高度な経済的な分業」は、多種多様な個人の特殊性と専門化とを受け入れるが、しかし他方では競争の激化が自己の特殊性の主張を困難にし、ここから個人を「偏った奇異へと誘発する」(239)。

高度な経済的な分業は、こうして個人に個性の発達と自由の増大をもたらしたが、他方では生産技術と芸術、学問と家庭環境の事物などの客観的文化の繁茂をもたらした。ところが個人はその巨大な客観的文化のごく僅かしか自己のものとはなしえない。こうして「現代文化の発展は、客観的精神と名づけることのできるものの主観的精神にたいする優越によって特徴づけられる」(240)。そして文化の発展はますます両者の間隔を大きくし、「客観的な文化の繁茂にたいして個人はますます対抗できなくなり、……個人は事物と力との巨大な組織にたいして、〈取るに足らぬもの〉へ、微塵へおし下げられ、この巨大な組織はすべての進歩と精神性と価値とを次第に個人からかすめ取り、それらを主観的な生の形式から純粋に客観的な生の形式へと移しかえる」(240-1)。

大都市はまたこの巨大な客観的な文化の固有の舞台であり、そこでは「生

活は人格にとっては一方では無限に容易となる。しかし他方で生活は、非個人的なこのような内容と提供物からますます合成されるようになり、これらが本来は個人的な色調と無比性とを排除しようとする」(241)。そこで個人はそれに対抗して、また自己の特殊性の極端なものを呼びおこさなければならない。そしてこの「客観的な文化による個人的な文化の萎縮」が、ニーチェなどの極端な個人主義者に大都市への激しい憎悪をいだかせる理由であり、また大都市人にはこのような個人主義者が、「彼らのもっとも満たされざる憧憬の予言者兼救済者と思われる理由でもある」(241)。

ここで再び大都市によって育まれた個人主義にかえれば、18世紀は「個人の独立性」を主張し、「自由と平等」を求めたが、19世紀は一方ではロマン主義と他方では経済的な分業とによって、「個人的な特殊性」を主張し、「質的な唯一性と代替不可能性」を求め、現代では各個人のなかにこの二つの個人主義的な要求が、混淆しあって共存する。そして大都市は「この両者の闘争と和解の試みとのための場所を提供する」(242)。

以上われわれはジンメルによる現代社会の典型として大都市における「新しい」人間の現代的な生存の様式をみた。大都市のもたらす多数の人間と豊富な財貨の多くの刺激のなかに、人びとは貨幣経済と悟性の支配のもとにたがいに「悟性的な態度」をとり、「没主観的」に相互作用しあい、「形式的な正義」をたもちながらも、それゆえに相互に「平準化」しあい、それによって「正確性と計算可能性と精密性」ある生活秩序をつくりあげるが、それゆえにまた多数の人間と事物の変化に「倦怠」し、他者にたいして「無関心」あるいは「冷淡」たらざるをえず、これはときに「嫌悪」から「疎遠と反発」、さらには「憎悪と闘争」となり、あるいは「反感」から「距離と回避」となる。このように生きる諸個人の集積は、「孤独な群衆」(リースマン)のいまひとつの姿である。そしてこの群衆のこの「孤独」こそ、まさに個人の「自由」にほかならない。

この「自由」の増大は、豊富な「客観的な文化の繁茂」への無限の発展の可

能性を個人にもたらすが、現実には個人はその限界よりして狭小な領域に限定され、「個人的な文化の萎縮」をきたしている。そしてこの状況のなかに、個人主義には「個人的な独立性と個人的な特殊性」の二つの要求が生じ、現代では個人のなかにこの二つの要求が相互作用しながら共存している。しかし、大都市の経済的分業と社会分化とは、この二つの要求の闘争と和解の場を提供しており、いわばこの場をいかに生きるかが大都市人の「自由」の直面する問題となっている。

ここに示される都市人の姿は、資料の厳格な考証のうえに事実を明らかにしようとする歴史家からすれば、彼らが多様な刺激に「意味」を求めながら、たがいに孤独にさまよう「空想の遊戯」ともみえよう。しかしそれは、まぎれもなくこれまでには見られなかった新たな現代人の簡潔な姿であり、モデルネのひとつの社会学的な考察であろう。

## VI. 概 括

以上われわれは G. ジンメルにたいする最近の一部にみられる評価、モデルネの現象学的な社会学者という評価について考察した。すでに示したようにジンメル自身は、モデルネを研究対象としたわけでも現象学的方法を意図したわけでもない。ただ彼は人間を社会的な存在と考え、現代社会を分化過程にあるもの、それが人間の個性を分化させて個人を成立させ、この個人が自由な生存を要求することを認識し、現代分化社会の個人の生存の可能性を彼の問題とした。すでに紹介した『分化論』の次の文章、「社会学的な思考に最初の客体として提供される集団全体の運動とは逆に、以下の考察は、実質的には個人の地位と運命とをとりあげ、個人を他の個人とともに社会的な全体に結合する相互作用によって、いかにして個人にその地位と運命とがあてえられるかを示そうとする」という文章は、彼の生涯をつらぬく努力の目標を示すものとなった。そして彼のこの努力の結果が、はからずもモデルネの現象学的考察と評価されるようになったわけである。

そして彼のこの問題、「現代社会における個人」の問題にとっては、社会

を基本的には個人の相互作用とみる見解は、まことにふさわしかった。しかしこの相互作用の「微視的・分子的な過程」は、これまでは社会諸科学の研究対象としては「未開拓の領域」であっただけに、彼は新たに「心理学的な顕微鏡」をもとめ、芸術の印象主義を範として、「鷹の目のように鋭い視力」によってそれを考察しようとした。この視力による考察を以上に要約したが、実はこれらの考察ほど、この種の要約にふさわしくないものはない。清水幾太郎は『社会学の根本問題』の「訳者後記」に、本書は第一章の「最初の部分を除くと、小説のように面白く読める」(3; 133)と書いている。「小説のように面白い」かどうかは人にもよるであろうが、少なくともジンメルのこれらの微視過程の考察は、社会学書としては珍しくわれわれにじっくり「味わう」ことを要求し、このことが彼の考察が「現象学的」とされることへと導いた。

彼へのこの「現象学的」という評価にかんしてここでつけ加えておく必要があるのは、すでにふれたが彼は現象学の創始者フッサールと親しかったが、また S. ゲオルゲ、R. リルケ、さらには A. ロダンなどとも親しく、したがって文学と芸術における新しい傾向とも身近に接し、それを深く理解したということである。そこから彼は現代文化の考察にあたって、現代においては伝統的な文化形式にたいする否定が、「形式一般の原理にたいする敵対」

(J-11) と、さらに「生のもつ純粋な直接性」(12) の表現への主張となって現れ、そのような動向を示すものとして芸術の表現主義と印象主義とをあげ、それらを肯定的に説明している (12-3)。そしてこのジンメルが、すでにみたように社会学上の相互作用の微視的な「未開拓な領域」に直面して、「心理学的な顕微鏡」によってさまざまに努力し、さらに「直感的な処理」を避けえないとし、そのさいの範として芸術をあげたが、そこで具体的に考えられたのは以上の印象主義と表現主義であったことは注意されてよい。

そして彼のこの努力の成果がすでに見たように「印象主義的」とされ、また「現象学的」とされるとすれば、現代の分化と多元化と流動化のなかにおかれた現実が、新たな問題意識と接近方法とを必要とし、F. フェルマンの

いうように「現象学と表現主義」(20)、さらにくわえて印象主義とは、この現実の要求にこたえるものであり、ジンメル为社会学的な考察もまたそうであったことになろう。というよりはむしろ、すでにみたように現代の先端、第二次産業革命の先端に位置したベルリンの文化的な雰囲気は、対象への伝統的な考察に代わる新たな志向性を求め、ジンメルを囲む人びとがこの要求にこたえ、ほぼ共通の方向へ向かい、そして共通なこの方向が、芸術家たちにおいては印象主義と表現主義となり、フッサールにおいては現象学になり、ジンメルにおいては形式社会学を中心とする社会理論の「心理学的な顕微鏡」となった。

そしてジンメル为社会理論が「現象学的」であり、これが現代社会における個人に向けられるかぎり、これはモデルネの社会学的な考察ともなり、われわれはそれを「大都市と精神生活」に見た。ところがこれは、彼の『貨幣の哲学』によるものであった。したがってモデルネについてのジンメルの考察としては、特にこの論文とともに『貨幣の哲学』があげられることが多い。しかし彼の仕事がベルリンと密接に結びついているとは、すでにみたように彼の語るところであり、当時のベルリンこそはモデルネを問題とするにもっともふさわしかった。したがって彼の業績一般に多少ともモデルネの考察をみることができる。

ところがわが国の社会学においてはジンメルは、もっぱら彼の社会化的形式において問題とされ、彼の社会学の實質的な内容、さらには『貨幣の哲学』の内容は殆ど問題とされなかった。そして世界恐慌にはじまる社会の危機は文化社会学の隆盛化とともに、彼の形式社会学は無内容な「形式主義」の名のもとに批判されることになった。というのも彼の理論の實質的な内容が問題とされなかったというよりは、むしろそれが一般には理解されなかったからではないかと思われる。このことはまた以上の『社会学の根本問題』への清水幾太郎の「訳者後記」のひとつの挿話にみることができる。

戦前の若き清水は、1927年に旧制東京高等学校の学生であったころ、『根本問題』の原書が絶版となっていて入手できず、たまたま東京商大から非常



勤講師として出講していた大塚金之助が留学帰りであったので、同書の借用をお願いしたところ、「どうして、あんな下らない本を読むのですか」といわれ、それでも自宅に送られた同書には添え書きがあり、そこには「悪いことは言わないから、マルクスを読み給へ きんのすけ」(3;141)と書かれていたという。

戦前のわが国の社会では大部分の農民は、「ヤンマー・ヘーレン」(8;57)に住み、加重労働に苦しみ、彼らの住む農村から「口べらし」に都市へ押しだされた労働者は、「インド以下的」(47)な低賃金に嘆かなければならなかった。少しまえにテレビに放映されて高い視聴率を誇った「おしん」の若い頃の悲惨な姿は、終戦までの生活体験をもつ国民の多少とも体験したところであり、したがって高度成長以前に社会諸科学に関心をもつ者は、マルクスとジンメルとを比較すれば、やはり前者を読まねばならぬと考えなければならなかった。この状況のなかで清水幾太郎と阿閉吉男とが、たんに「社会化の形式」への関心をこえてジンメルの業績に関心を示し、深い理解を示したのは、両者の関心にもよるであろうが、しかし、彼らがともに東京育ちであり、ともに東京高校の出身であることとも無関係ではないであろう。多くにとってはジンメルの書物、とりわけ「豊かな社会」を対象にした『貨幣の哲学』を典型に、その社会での人びとのすでに示した微妙な相互作用の社会学的な考察からなる社会学書は「下らない本」であり、ようやく高度成長をへた現在にいたってこれらを初めて実感をもって理解できるようになったといえよう。

逆に高度成長までは多くの社会学者にとっての問題は、マルクスをふくめての「近代化」であった。かつていわれた「マルクスかウェーバーか」、あるいは「マルクスとウェーバー」という言葉は、この状況を端的に表現するものであった。そして社会学においてはさらに高度成長後もジンメルへの関心を妨げたのは、戦後の我が国の社会学に大きな影響をおよぼした T. パーソンズが、ほとんどジンメルに言及しなかったことである。終戦までは彼に比して言及されることの少なかったデュルケムとウェーバーへの言及が逆

に多くなり、ジンメルへの言及は著しく減少した。同じ事情からするジンメルへの言及の減少はジンメルの祖国ドイツのばあいも同様であるという(10; 13)。このことと関係して興味があるのは、その後、パーソンズ理論への批判として現れた闘争理論と交換理論、象徴的相互作用説と現象学的社会学などが、いずれもジンメルの理論に依存し、あるいはそれとの近似性を示すということであり、このことがジンメルの著作集を刊行させ、また本論文が問題とした彼への新しい評価をもたらしたと思われる。

以上は総じて従来ジンメルの著作の邦訳と解説とによって彼の社会学説を紹介してきた者として、最近の彼の理論へのひとつを評価を紹介し、彼の理論がけっして社会学史上のたんなる過去ではなく、きわめて現代的な問題をはらむことを示し、にもかかわらずこれまでのわが国の社会学界においては彼の理論が不当に軽視されてきた事情を説明し、今日あらためて彼の理論を検討すべきであるということを説明したまでである。

ところがこの説明をつうじてさまざまな問題が生じる。たとえば以上にみた彼の相互作用における行為者の意識と行為との相互作用、大都市の環境と大都市人の意識、この環境にたいするニーチエの思想、これらについてのジンメルの説明は、ひとつの知識社会学あるいは文化社会学への可能性をあたえる。そしてさらに近代化理論とモデルネ理論とが必ずしも重ならないとすれば、それはなぜであるか。これはテンニエスやウェーバーの理論が多少とも歴史性をもつのにたいし、ジンメルの理論の「非歴史性」(27; x)が指摘されることと関係して、ジンメル理論の理解、さらに社会学理論一般の性質について興味ある問題を提起している。しかし本稿の目的はいちおうは以上で終えたので、これらの問題は他の機会にゆずりたい。

「引用文献」：次の略号と頁数のみをあげるが同じ文献の続くばあいは頁数のみ

#### I. ジンメルの著作

- A. “Bemerkungen zu sozialetischen Problemen”, *Vierteiljahrsschrift für Wissenschaftlichen Philosophie*, XII, 1888, S. 32-49.

- B. *Über sociale Differenzierung. Sociologische und psychologische Untersuchungen*, 1890.
  - C. “Soziologische Ästhetik”, *Gesamtausgabe*, Bd. 5, 1992, S. 197-214.
  - D. “Das Probleme der Soziologie”, *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* 18. 1894, S. 1301-1307=4, S. 271-77.
  - E. *Philosophie des Geldes*, 1900, (1920).
  - F. “Die Grosstadte und das Geistesleben”, *Brücke und Tür. Essays des Philosophen zur Geschichte, Religion, Kunst und Gesellschaft*, 1957. S. 227-42.
  - G. *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, 1908, (1923).
  - H. *Hauptprobleme der Philosophie*, 1910, (1964).
  - I. *Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)*, 1917, (1970).
  - J. *Der Konflikt der modernen Kultur*, 1918, (1926).
  - K. *Lebensanschauung. Vier metaphysische Kapitel*, 1918, (1922).
- II. ジンメル以外の著作
- (1) 阿閉吉男編『ジンメル社会学入門』有斐閣、1978 年。
  - (2) M. ウェーバー、尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫、1981 年。
  - (3) 清水幾太郎「訳者後記」(ジンメル『社会学の根本問題』岩波文庫、1979 年)
  - (4) E. デュルケーム、田原音和訳『社会分業論』青木書店、1971 年。
  - (5) F. テンニエス、杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上下、岩波文庫、1957 年。
  - (6) F. フェルマン、木田元訳『現象学と表現主義』講談社学術文庫、1994 年。
  - (7) ゴーロ・マン、上原和夫訳『近代ドイツ史』1、みすず書房、1977 年。
  - (8) 山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波文庫、1977 年。
  - (9) H-J. Dahme (ed.), *Georg Simmel und die Moderne*, 1984.
  - (10) H-J. Dahme, “On the Current Rediscovery of Georg Simmel’s Sociology — A European Point of View”, M. Kern, B. S. Phillips and R. S. Cohen (eds), *Georg Simmel and Contemporary Sociology*, 1990, pp. 13-37.
  - (11) W. Dilthey, *Einleitung in die Geisteswissenschaft, Gesammte Schriften*, Bd., I. 1966.
  - (12) H. Freyer, *Soziologie als Wirklichkeitwissenschaft*, 1930.
  - (13) D. Frisby, *Fragments of Modernity*, 1985.
  - (14) D. Frisby, *Simmel and Since*, 1992.
  - (15) C. J. H. Hayes, *A Generation of Materialism, 1871-1900*, 1966.
  - (16) M. Kaern, “The World as Human Construction”, M. Kern, B. S. Phillips and R. S. Cohen (eds), *Georg Simmel and Contemporary Sociology*, 1990.
  - (17) D. N. Levine, “Introduction”, D. N. Levine, Georg Simmel. *On Individuality and Social Forms*, 1971.

- (18) G. Lukács, "Erinnerung an Simmel", K. Gassen und M. Landman (eds) *Buch des Dankes an Georg Simmel*, 1958.
- (19) K. Mannheim, "German Sociology (1918-1933)", *Essays on Sociology and Social Psychology*, 1953.
- (20) R. Mayntz, "Simmel, Georg", D. L. Sills (ed), *International Encyclopedia of Social Sciences*, vol., 14. pp. 251-58.
- (21) R. E. Park, *The City*, 1925.
- (22) Dr. O. Thon, "The Present Status of Sociology in Germany", D. Frisby, (ed.), *Georg Simmel, Critical Assessments*, 1994.
- (23) F. Tönnies, "Besprechung", *Jahrbucher für Nationalökonomie und Statistik*, vol. 56, 1891, S. 269-77.
- (24) E. Troeltsch, "Der historische Entwicklungsbegriff, in modernen Geistes-und Lebensphilosophie", *Historische Zeitschrift*, 124, 1921. S. 418-86.
- (25) H. Simmel, "Auszüge aus den Lebenserinnerungen", H. Böhlinger und K. Crunder (eds), *Ästhetik und Soziologie um die Jahrhundertwende: Georg Simmel*, 1976.
- (26) M. Weber, tr. by D. N. Levine, "Georg Simmel as Sociologist", *Social Research*, 39, (1972), pp. 158-63.
- (27) K. H. Wolff, "Preface", *Essays on Sociology, Philosophy & Aesthetics by Georg Simmel et al.*, 1959, pp. xvii-lxiv.